

◀ SPECTRA X20 試作カード
(提供：カノーブス)



前号までで29回を数えた「Inflection Point」だが、30回めの今回より装いも新たに「Silicon EYES」とタイトルを変えて再スタートする。これまで同様、PC業界のさまざまな話題を筆者の視点からお届けするというスタイルに変更はないので、今後ともよろしくお付き合いいただきたい。

◉ NVIDIAの拡大成長により、デフレスパイラルが発生した
やや旧聞に属する話で恐縮だが、本誌4/15号のこの連載で、ビデオカードについて取り上げた。かいつまんでいうと、老舗のブランドメーカーに代わり台湾のビデオカードベンダーが台頭してきて、カノーブスのような技術で勝負するメーカーは生き残るのが大変だろうという話であった。その後、そのカノーブスでビデオカードの開発を担当するカノーブスGP開発部部長 中田潤氏にお話を伺う機会を得た。
「NVIDIAの力が強まるにつれビデオカードの市場に変化が起きているのではないかと？」と質問してみたところ、「確かに

NVIDIAはビジネスモデルを転換してきている。以前は大手のビデオカードベンダーを重要顧客として、彼らの力を利用することでNVIDIA自身も成長しようとしていた。しかし、その段階を過ぎ、彼らは大きくなり、今度は数を売らなければいけなくなった。だから台湾メーカーのように大量出荷を前提にしたメーカーのほうを向くようになった」(中田氏)とし、NVIDIAがビデオチップ市場を席巻するようになったことにより、以前のカードベンダーが力を発揮しにくくなり、結果OEM市場をメインターゲットにしている台湾ベンダーが台頭するようになったと指摘している。

実際のところ、老舗のビデオカードメーカーはエルザやギルモを除いて、ほとんど消えてしまったような状態にある。その代表格として挙げられるのは、なんといってもクリエイティブメディアだろう。

GeForce2の世代までは、クリエイティブメディアはNVIDIAのビデオチップを一番最初に発売するNVIDIAの最重要顧客であった。ところが、GeForce3搭載カードベンダーの中から、クリエイティブメディアの名前が消えてしまったのだ。

クリエイティブメディアに取って代わったのが、ASUSTeK COMPUTERやLeadtek Researchなど台湾系のベンダーだ。「台湾メーカーは技術を競うのではなく、コ

ストを最重要視する。となれば、本来必要なものを省略してもコストを削減していくため、どのメーカーもリファレンスデザインのまま急いで市場に投入することになる。これが繰り返されてデフレスパイラル(価格の続落)が起こっていく」と、中田氏は台湾メーカーの台頭によりビデオカード市場に低価格競争が巻き起こっている現状を説明してくれた。ここまでは、4/15号で筆者が説明したのと大きな違いはない。

◉ 「日本はクオリティを重視する市場」とカノーブス

「しかし」と中田氏は続ける。「確かにワールドワイドのマーケットではコストが何よりも重要視されるが、日本ではそれと同時にクオリティ重視の傾向が強い。高くても品質に納得できれば買っていたくれる、これは非常に珍しい市場」(中田氏)と日本市場の特殊性を説明する。実際、台湾のマザーボードベンダーと話していると、そういう話をよく耳にする。

「カノーブスのビデオカードがなぜ売れているか、当のNVIDIAも不思議がっているほどだ」と中田氏は笑う。しかしNVIDIAのこのような反応は、決して珍しいものではない。

中田氏によれば、カノーブスとNVIDIAとは現在も、今までと変わらずよい関係に

あるという。「GeForce3のラウンチパートナーに弊社が入っていないのは、GeForce3の発表が、前世代のGeForce2 Ultraを当社がリリースした直後であったことがその理由だ。日本の商習慣では『前の製品が出たあとすぐに新製品』というわけにはいかない。しかし、世界市場に向けたチップの発表と当社カードについての情報公開は別のことだし、GeForce3搭載カードも満足いく形で製品化できた」と、決してNVIDIAとの関係が疎遠になっているわけではないことを強調した。

◉ 似た物が出てくるのは本物の証

さて、カノーブスは6月にGeForce3を搭載した同社の最新ビデオカードである「SPECTRA X20」(以下、X20)を発表し、6月中旬には店頭に並び出したが、秋葉原ではあつという間に売り切れてしまったという。X20の店頭価格は6万円強。台湾ベンダーのGeForce3搭載ビデオカードが、安いものなら4万円で買えることを考えると、実に2万円も高い。

台湾ベンダーのビデオカードが安いのは、先にも述べたように、NVIDIAが提供するリファレンスデザインをそのまま採用しているため、低コストで作れるというのが大きい。

これに対してカノーブスは、独自設計の基板を利用している。「例えばGeForce3のリファレンスカードでは4層基板を採用していて、ノイズを避けるためにややぼけた感じの画像になっている。これに対して弊社のX20では6層基板を採用しており、1層め、2層めの間をわざと狭くしたり(インピーダンスコントロール基板)、電源の層で独自に線を引き回すなど、ノイズをできるだけ低減する設計になっている」と、中田氏は目に見えないところで差をつけていることを強調する。

このほかにも、X20にはカノーブスの工夫がいろいろと詰まっている。例えば、電源だ。X20では5V、12V用の外部電源コネクタが用意されており、PCの電源ユニットから電源を供給するようになっている。実際、GeForce3はこれまでよりもたくさんの電力を消費するチップである。

これについて中田氏は「AGPに供給される電力はマザーボード上のほかのデバイスも利用するので、ビデオチップの消費電力が上がると、例えばメモリへの電力供給が足りなくなり、メモリを増やすとシステムが安定しなくなるなどの事態が起こることがある」と危惧している。そのためX20では外部電源コネクタから電力を供給し、少しでも不安定になる要素を減らそうとしているという。ここにもカノーブスの工夫を

うかがい知ることができる。

ここに紹介した以外にも、カノーブスはさまざまな工夫をしている。すでにX20に関しては本誌でも紹介しているのでここでは省略するが、一つ面白い事例がある。

例えば、韓国のSUMA(SUPERMICRO SYSTEM)は、カノーブスがSPECTRAシリーズに採用しているSSH(Signal Super Highway)にそっくりなSIF(Suma Individual visual analog Filter)というコネクタを採用したカードを出している。SUMAとしては、SIFは自社オリジナルの技術だと主張するだろうが、まあ誰が見てもSSHと似ていることは否定できないところだ。

これについて中田氏は「SUMAのカードについては、当社でも実際に試験してみたが、品質に関しては圧倒的に差があると判断し、とくに問題ではないと考えている」と余裕の構えだ。確かに、逆にいえば海外のメーカーでさえ、カノーブスの技術的アドバンテージを認めて、それを真似することが自社製品の価値を高めることになることと認識しているということであり、カノーブスにとっては誇るべきことなのかもしれない。「似た物が出てくるというのは本物の証だろうと笑い話になっている」と中田氏が笑うのも、自社の技術にそれだけ自信があるからなのだろう。

自社開発技術を盛り込んだビデオカードが減る中で、カノーブスのビデオカードはとびきり目立っている。発売開始2日で売り切れたという事態も、ユーザーに支持されている証だといえるが、そうはいっても以前に比べその付加価値の部分が徐々に分かっていくなってきたのも事実である。今後新規ユーザーを獲得し、裾野を広げるという意味では、「2万円の差」をユーザーにどう分かりやすく説明していくかがカノーブスの課題といえるだろう。

いずれにせよ、我々は「よいもの」が欲しいのだ。そうした意味でカノーブスのようなメーカーには、さらに優れた製品を出し続けてほしい、と思うのである。

X20の試作カード上に飛ばされているリード線。実際の製品ではこの分配線が基板上に引き回されている。こうした試行錯誤を繰り返し、リファレンスとは違うよりよいデザインを探している。このあたりが他メーカーに比べて製品化に時間がかかるゆえんである



X20の試作カード。製品版には載っていない、モニター用のチップが搭載されている。これを利用し、AGPポート経由でビデオチップの動作状況などをモニターしながら製品化までのテストを行ったという

笠原一輝
Kazuki Kasahara

SPECTRA X20はほかのGeForce3搭載カードよりなぜ高い？ カノーブスのビデオカード戦略を考える

Inflection Point 改め

Point 30

シリコンアイズ
Silicon EYES

212
DOS/V magazine 2001-9.1

213
Silicon Eyes